



**Data**

監督・脚本：タナダユキ  
出演：高畑充希／柳家喬太郎／大久保佳代子／甲本雅裕／佐野弘樹／神尾佑／竹原ピストル／光石研／吉行和子

## 👁️👁️ みどころ

『百万円と苦虫女』（08年）と同じように、『浜の朝日の嘘つきどもと』も奇妙なタイトル。茂木莉子（もぎりこ）と名乗る若い女性・浜野あさひが、閉館寸前のミニシアター「朝日座」を訪れるところから始まる。本作の脚本はタナダユキ。こりゃ面白いはずがない！

福島中央テレビ開局50周年の記念作としてドラマと映画を同時に作る企画に、福岡出身の同監督が抜擢されたのはなぜ？故郷のミニシアターを愛する気持ちは私も同じだが、さすが彼女は女性の心理の描き方がうまい。あさひが奇妙な女教師と過ごす高3の夏休みの是非を含め、当たり前前の規律を当たり前のように押し付けない同監督のスタイルは心地よい。

地域に根差すミニシアターの再建は、クラウドファンディングで！それはそれでわかるが、あさひはなぜそんな奮闘を？タナダユキ監督特有の、温かく、人情味豊かなオリジナルストーリーをしっかりと味わいたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ 福岡出身監督が福島で大活躍！TVと映画の脚本を！ ■□■

タナダユキ監督は、『百万円と苦虫女』（08年）で第49回日本映画監督協会新人賞を受賞して注目された（『シネマ20』324頁）が、私はその前の『赤い文化住宅の初子』（07年）（『シネマ13』214頁）を観て、俄然、1975年生まれ的女性監督に注目していた。彼女は両作とも監督と脚本を兼ねていたが、そのスタイルは、以降の『四十九日のレシピ』（13年）（『シネマ31』51頁）、『ロマンス』（15年）（『シネマ36』211頁）等すべてに共通している。それは、もちろん本作も同じだが、実は本作の脚本は、「福島中央テレビさんから『ドラマと映画を同時に作りたい』、「福島が舞台であれば、あとは自由でいい」、「東日本大震災や復興のことも、前面に出さなくていい」という条件で

書かれたものらしい。TVドラマ『浜の朝日の嘘つきどもと』は福島中央テレビ開局50周年記念として、2020年10月30日に福島県内で放送され、全国でもオンエアされたようだ。

しかし、なぜ九州の福岡出身の彼女が福島県で登用されたの？福岡といえば、武田鉄矢、小柳ルミ子、チェッカーズの藤井フミヤ等さまざまな著名人を輩出しているが、福岡と福島は薩摩・長州 vs 会津の対決を持ち出すまでもなく、“水と油”。同じ日本人間でも価値観が大きく違っているはずだ。しかるに、なぜ福岡出身のタナダユキ監督が、福島中央テレビで登用されたの？本作のパンフレットを読んでも、そこまでは書かれていないが・・・。

## ■□■テーマは震災・復興！いやいや、テーマは映画館！■□■

福島中央テレビの開局50周年記念としてオリジナルドラマを企画。そう聞くと、そのテーマは当然震災、あるいは復興。誰でもそう発想するはずだが、前述の条件で企画を引き受けた彼女は、テーマを映画館とすることに。松山市内の自宅近くに私が中高校時代に通った懐かしい映画館があるのと同じように、福岡出身のタナダユキ監督も生まれ故郷によく通った懐かしい映画館があるはずだ。しかして、同企画では、その懐かしい映画館を福島県の南相馬にある映画館「朝日座」とすることに。

イタリア映画の名作『ニュー・シネマ・パラダイス』（89年）（『シネマ13』340頁）の舞台は、シチリア島にある映画館「パラダイス座」だった。そして、主人公の少年トトは、そこで映写技師のアルフレードから仕事を教えてもらっていたが、残念ながら「パラダイス座」は全焼。その原因は、フィルムに火がついてしまったことだが、私は同作を見てはじめて映画フィルムの“可燃性”を学ぶことができた。

しかして、本作冒頭に見る「朝日座」の支配人・森田保造（柳家喬太郎）と、ある目的を持って「朝日座」に乗り込んできた茂木莉子（高畑充希）との最初の出会いは、森田があるフィルムを燃やしている場面だったからビックリ。まさか、『ニュー・シネマ・パラダイス』と同じように火事になることはないだろうが、「朝日座」の支配人・森田はなぜそんな行動を？

## ■□■2人の女優がグッド！落語家もグッド！■□■

タナダユキ監督は、『百万円と苦虫女』で女優・蒼井優のユニークな魅力を最大限引き出していたが、それと同じように『四十九日のレシピ』では永作博美の、『ロマンス』では大島優子の魅力をうまく引き出していた。パンフレットの「タナダユキ監督インタビュー」で彼女は、「高畑充希さん演じる茂木莉子というキャラクターは、どのように生まれましたか？」という質問に対して、「昔から、すごい嘘つきで口の悪い女の子を描いてみたいと思っていました（笑）」と答えている。高畑充希は、私が瀬々敬久監督の『明日の食卓』（21年）で俄然注目した女優。同作では、菅野美穂、尾野真千子という2人のビッグネームに一步も引かない熱演で難しい母親役を演じていたが、本作では、肩の力を抜いた森田との掛け合いがうまくツボにはまっている。さらに、少し厚かましい（？）が、高1～高3

の役も演じているので、それにも注目！

他方、屋上で飛び込み自殺の疑いをかけられた高1の莉子と奇妙な出会いをし、奇妙な指導をしていく、ユニークな教師・田中茉莉子役を演じるのは、お笑い芸人出身の大久保佳代子。私は、この大久保佳代子も相手の光浦靖子も名前と顔は知っているが、全然興味がなかった。しかし、本作での大久保佳代子の演技を見て、これはなかなかのものだ、と再評価することに。

さらに、落語家の映画界進出といえば、山田洋次監督や吉永小百合御用達(?)の笑福亭鶴瓶が有名だが、本作では森田役を落語家の柳家喬太郎が演じている。某局の朝のニュース番組でコメンテーターをしている落語家の立川志らくは自信過剰気味だし、正論ぶっているので私は全く好感を持ってないが、本作に見る俳優・柳家喬太郎はグッド。口の悪い莉子から「おっさん」と呼ばれ、「朝日座」の売却を世話している同級生よりかなり老けて見える森田は、『ニュー・シネマ・パラダイス』の映写技師と同じように、いやそれ以上に、生き方や喋る内容が哲学的だ。彼はあの時、なぜサイレント映画の名作『東への道』のフィルムを燃やしていたの？さらに、彼はなぜ「朝日座」の売却を決意したの？逆に、なぜ莉子の口車に乗ってクラウドファンディングによる「朝日座」の継続に同意したの？

“残念な結末”を迎える中での、彼の心境は如何に？長い間映画館と共に歩む人生を送りながら、若い時に観客の1人である茉莉子から「2本立てのラインナップが最悪だ」と言われてしまった森田の映画人生を考えながら、落語家・柳家喬太郎の俳優としての演技をしっかり味わいたい。

## ■□■ “浜野あさひ” はなぜ孤立？父親との確執は？ ■□■

本作は、「茂木莉子」と名乗る女性が「朝日座」の支配人・森田と出会うところから物語が始まり、「朝日座」の存続のために奮闘する姿がメインストーリーになっていく。他方、それに並行するサブストーリーとして、莉子がなぜ本名の「浜野あさひ」に拒否感を持ち、仲間から孤立し続けていたのかが描かれていくので、それにも注目！2011年3月11日に起きた東日本大震災は莉子が高1の時。これはもちろん大惨事だが、タクシー会社で除染作業員の送迎を担当していた莉子の父・浜野巳喜男（光石研）は、独立してタクシー会社を起し、懸命に働いた結果、やがて莫大な利益を上げたと言われるようになり、莉子は友達がひとりもいなくなってしまうらしい。コロナ禍の中で旅館・ホテル業界は最悪だが、他方で“ステイホーム”をターゲットにしたデリバリー事業は善戦しているから、コロナ禍も暗い面ばかりではない。しかし、莉子はそんな父親のせいで友達が1人もいなくなってしまうから、アレレ。

そんな莉子が1人で屋上に立っていた高2の時に出会ったのが、同じように屋上を勝手に自分の居場所にしてた数学教師の茉莉子だ。飛び降り自殺の話題をシャーシャーと口にしながらか、人の心の中にズケズケと入り込んでくる変な教師・茉莉子が大の映画ファンだったため、それにつられて莉子も映画ファンになることに。巳喜男は自分が立ち上げた

タクシー会社の名前を、何とも安易に娘の名前の「はまのあさひタクシー」にしてしまったから、たまらないのは娘。以降、いじめられるのが嫌さに、自分の名前を嫌いになってしまったのは仕方ない。なるほど、そんなことがあったため、あさひは森田と会った時に、「茂木茉莉」と嘘の名前を！

## ■□■ 17歳の夏休みは同棲中の女教師と！その是非は？ ■□■

17歳といえば、青春真っ盛り。私たち団塊世代の17歳は、昭和39年の東京五輪を終え、高度経済成長が始まったところだから、17歳の若者たちは元気いっぱい。映画では日活の青春モノが、歌では舟木一夫の「高校3年生」や西郷輝彦の「17歳のこの胸に」等が大ヒットしていた。

それに対して、高1の時に2011年（平成23年）3月11日の東日本大震災に遭遇したあさひは、父親との確執、高2の時の屋上での茉莉子先生との出会いを経た高3の時は、母親と共に東京で生活していた。しかし、高3の1学期で学校をドロップアウトしてしまったから、平成の時代を生きていたあさひの青春（＝17歳）は、昭和の青春を謳歌した私たち団塊の世代とは違い、悲惨なものだった。そんなあさひがある日ぶらりと訪れたのは、郡山にある茉莉子先生の家（アパート）だ。

いかに夏休み中とはいえ、高3の女の子の家出は由々しき問題だが、茉莉子先生があさひの母親に電話すると、母親は娘の“家出”を事実上了解した（？）からビックリ。もともと、快くあさひを受け入れた茉莉子先生の方は年下の男と事実上の同棲中で、男をしょっちゅう家に引き込んでいたから、そんな時にはあさひは家から出て行かざるを得なかった。それでも2人にとってそんな自由気ままな夏休みは快適だったらしい。しかし、夏休みが終われば・・・？そして、母親が“娘の保護願い”を警察に届け出ることになると・・・？あさひが実家に戻りさえすれば、母親は被害届を提出しない。そんな条件をあさひが呑んだため、茉莉子先生は警察の留置所から釈放されたが、その後の2人の生活は？

あさひは高校卒業後、東京の映画配給会社に勤め、それなりにまともな生活をしていたが、茉莉子先生の方は相変わらず若い男をとっかえひっかえしながら、学校では独特の教師生活を送っているはず。あさひはそう思っていたが、さて、事態は意外にも・・・。

## ■□■ 師弟の別れは？連れの男は？遺言は？ ■□■

男同士の師弟関係は長く続くことが多いが、女同士のそれが長く続くのは少ない。映画を通じた、また、お互いのハチャメチャな性格の共通性に根を張った（？）あさひと茉莉子先生との師弟関係が瀬戸川に進んだのは、実質的にはあさひが高3の夏休みだけだったが、それは他に類を見ない（？）濃密な関係だった。そのため、2019年、東京の映画配給会社に勤めていたあさひの元に「茉莉子先生が病に倒れた！」との連絡が届くと、あさひはすぐに郡山の病院へ。再会した茉莉子先生の元にはベトナム人の若者チャン・グオック・バオ君（佐野弘樹）が付き添っていたが、この2人の関係は異例の長らしい。すると、この男女関係はひょっとして本物？

あさひの出自や父親との確執、そして自殺願望(?)や高校のドロップアウト、更に家出等々、あさひの事情については茉莉子先生との語らいの中でタイムリーに説明されるが、さて茉莉子先生の出自や教育への思い、そしてバオ君への思いは?それは、余命数ヶ月宣言を受けた中であさひの訪問を受けた茉莉子先生の口から少しずつ語られるので、それに注目!そんな茉莉子先生があさひに残した遺言が、南相馬にある「朝日座」の再建だが、茉莉子先生はあさひになぜそんな遺言を?

### ■□■朝日座の買戻しは?ヒロインの奮闘は?資金の調達は?■□■

なるほど、なるほど。冒頭のあさひと森田との初のご対面はそんなバックグラウンドの中で実現したものだ。もっとも、それならそれで、あさひは偽名など使わず、はっきり説明した方が話はスムーズに進むはずだが、コトを順序に沿って常識的に運ぶことができないのがあさひの性分らしい。したがって、いきなり娘みたいな女の子からフィルム燃やしを中止され、クラウドファンディングをやらされるようになった森田が戸惑ったのは当然だ。しかし、森田だって、本心では「朝日座」の再建を望んでいたのは当然だ。もっとも、不動産(「朝日座」)の売買契約が締結されていれば、その解約には受け取った手付金の倍返しが必要だし、本作を観ていると、解体が前提だったようだから、もし森田が売るのを中止すれば、解体費用1000万円も要求されるらしい。クラウドファンディングでの早速の入金に喜んだものの、その金額は120~130万円程度だから、とてもとても……。その上、「朝日座」再建をぶち上げ、地域の人々へのピラ配りなどの奮闘を始めたあさひ(=茂木莉子)に対して、はじめのうちは「朝日座」を愛する南相馬の住民たちの目は温かかったし、再開した映画館への出入りも良かったが、ある日それがピタリと止まってしまったから、アレレ。これは、買い主側が、「映画館より温泉センターの方が地域の人々の役に立つ」と逆宣伝を始めたためだが、なるほど、それにも一理はある。

しかして今、解体作業を目の前に行っている莉子と森田は、完全に敗北を認め、互いの奮闘を慰め合っていたが……。

### ■□■なぜこんなどんでん返しに?映画ならこれが可能だが■□■

こんな映画のラストはハッピーエンドと決まっている。そう思っていたが、意外や意外、本作はあさひの夢が破れ、「お互い、よく頑張りましたね。」で終わるの?いやいや、タナダユキ監督が福島中央テレビ開局50周年記念作品として書いた脚本や映画がそんな結末になることはあり得ない。そう思っていると、案の定。本作ラストの大団円では、①クラウドファンディング額の増加、②駆けつけてきたバオ君が明かす、茉莉子先生のバオ君への遺言、そして遺贈を受けたバオ君への「朝日座」への500万円の寄付、そして③「誰にも内緒だが……」の前提ながら、莉子の父親・巳喜男の1000万円の寄付、等々が明かされるので、それに注目!

私が高中生時代まで過ごし、中3、高1時代の週末にはいつも通っていた松山市内の3本立て55円の映画館は、日本の高度経済成長とバブル経済の中で閉鎖されてしまった

し、そもそも松山市の街並みそのものが大きく変わってしまった。本作冒頭に見る「朝日座」の2階建ての堂々とした建物は正面が“広場”といってもいいほどの大空間に面しているから、立地は最高。したがって、この建物が解体されず、南相馬に移住し、「朝日座」と共に生きていく、と決心したあさひが、新たな支配人になって運営していくことができればそりゃ最高だ。大阪では私が時々通っているユニークな映画館シネ・ヌーヴォーが有名だが、同館のラインナップは素晴らしいし、経営の工夫と努力は涙ぐましいものがある。

ちなみに、私は先日、『全国85劇場 ミニシアターのある町へ。～映画の余韻と楽しむお散歩ガイド～』（JTBパブリック刊）という小冊子を購入した。そこには、シネ・ヌーヴォーはもとより、東京のポレポレ東中野や岩波ホール、京都の出町座など15のミニシアターが特集されているが、地方では広島の新ネマ尾道と佐賀のシアター・シエマしか掲載されていない。また、同書は日本全国のミニシアター70を掲載しているが、残念ながら「朝日座」はそこに入っていない。つまり、南相馬の「朝日座」は同書に特集されるほど有名ではないわけだ。それは残念だが、「朝日座」の新たな支配人になった茂木莉子には、同書の改訂版に掲載してもらえるように頑張ってもらいたい。同書の目次には、シネ・ヌーヴォーの若き支配人である山崎紀子氏の写真が載っているが、その改訂版には、ぜひ茂木莉子の写真を！

2021（令和3）年9月29日記